

を踏査して、交通・風俗・物産・史跡を研究。幕命により「武蔵五郡の図」及び「四神地名録」を作成、また「西遊雑記」「東遊雑記」「東亜地図」を著す。文化4年〔1807〕歿、82才。「東遊雑記」は幕府巡見使に随行して東北地方を実査して成った書、天明8年〔1788〕成立、平凡社版「東洋文庫」に収めてある。

注(2) 「奥道中歌」の一節に『国分の町よりこゝえ七北田よ 富谷茶のんであじは吉岡 さむいとて焚れぬものは三本木 雪の古川荒谷つめたや おもひきり日は高清水宿とりの 杖築館て道いそぐとは あれ宮野沢辺の螢草むらに なく鈴虫のこえは金成……』

注(3) 「孔子家語」〔こうしけご。10巻、著者不明。魏王肅註〕『周制三百歩為里』

注(4) 大宝律令の令の部。雑令に『凡度地五尺為歩三百歩為里』とある。大宝律令とは、文武天皇の大宝元年〔701〕に、忍壁〔おさかべ〕親王・藤原不比等らによって編纂された律6巻と令11巻である。律は刑法、令は行政法・訴訟法・民法を規定したもので、両者相並んで律令国家といわれる中央集権国家の根本法典をなした。中国法の模倣法であった。僅かの逸文のほかは失われて、今は大宝律令として伝えられているものは、元正天皇の養老2年〔718〕に大宝律令を修正増補した「養老律令」によるものである。

資料 仙台方言考（真山青果）

伊達騒動実録（大槻文彦）

言海（大槻文彦）

67. 「松窓乙二」はどう読むか

問 松窓乙二に「まつそうおつじ」と仮名を振ってあるのを見たが、正しくは何と読むのか。

答 松窓乙二は、文化文政時代に於ける東奥俳壇の第一人者と目〔もく〕される白石の俳人で、松窓は庵号です。「宮城県史」第14巻に『千住院のあとは今医院になっているが、そこには一本の大赤松が遺っている。乙二が七、八才の頃の天明^{××××}7年〔宝暦12年頃の誤。天明7年〔1787〕は父麦羅の歿年、乙二は宝暦6年〔1756〕生れであるからこの年32才の筈〕に「先人手づから庭裡に数株をうつし植え」た中の一株であって、すでに百七十年以上の樹齢を保っているのであるが、松窓という庵号も、先人遺愛の老松にちなんだものであった。』とあり、松窓は「しょうそう」と音読すべきであって「まつそう」などと湯桶読〔ゆとうよみ〕にするのは間違っています。

乙二とは、甲一〔甲も一も第一位〕を思いもよらぬこととしたこの人の謙虚さから出た俳号です。「追善句集 九日」に『祖翁〔芭蕉〕を上首として修業することなり。……乙二を上手とおもって修業しては、乙二が上に立つ事かたし……』とあります。その読み方については、次のように記されたものがあります。「松窓乙二」（小倉巖、乙二碑建立委員会昭和33刊）に「俳名は乙二と書いて「おつじ」と読む。おそらく甲一に対して謙遜した意であろう」。「宮城県史」第14巻に『乙二

はやはりおつにと読むべきであろう。……乙二の家の人は、今もおつにといっているということである』とあり、また「仙台郷土研究」第3巻第3号に『乙二の二をにと呉音に読む方が、僧侶である乙二にふさわしいと思う。それに乙二の家である亙理家では乙二の曾孫⁽¹⁾普〔すすむ〕がおつにといっていた。又その母堂もおつにといっていたというから、おつにが正しい読み方である。』とあります。かつて、京大教授で江戸文学特に俳諧研究の権威⁽²⁾頼原退蔵〔えばらたいぞう〕が乙二を「おつじ」と読んだことがあったが、見かけ上乙二は女性的俳名であるので読み方も「おつじ」〔お辻〕と女性扱いしてしまったのだといわれます。このような誤解は、乙二の生存中にもあったことで、乙二自身の「乙二句集（「をのゝえ草稿」）」（文政6〔1823〕序）の中にも『乙二とはをうな〔おみな〕の音便。女〕めきたる名なりといふ人に戯て答ふ

鉄漿〔かね〕捨に出〔いず〕れは艸〔くさ〕の虫かな

鬼灯⁽³⁾〔ほうずき〕の花は暮たに飛ほたる』とあります。「広辞苑」、「俳諧人名辞典」（高橋蒼梧）、「仙台先哲偉人録」、「仙台人名大辞書」（菊田定郷）、「宮城県史」第2巻、「俳句大観」（麻生磯次等編）等も皆おつにと読み、今はおつじなどという読み方は殆どなくなりました。芭蕉も「俳名は……只唱え清く調ひ……」と教えています。この点からしても、東北人にとって発音ににくい「おつじ」よりは「おつに」の読み方をとった方が適当です。

松窓乙二の読み方は、以上のように松窓と乙二とを別個に記したものの外に、「しょうそうおつに」と通した読み方を示しているものに「仙台市史」第1巻『……与謝蕪村の刺戟をうけた白石の松窓乙二（しょうそうおつに）は文化の頃に頭角を顕し……』、「仙台人名大辞書」索引や、「蕪村と松窓乙二」（藤井武夫、「奥州白石ばなし」の内）、「松窓乙二翁略伝」（片倉信光、「乙二自筆句帖」の後付）『俳号を松窓乙二（しょうそうおつに）と言った』、「俳諧大辞典」（伊知地鉄男・井本農一・神田秀夫・中村俊定・宮本三郎）などがあります。

注(1) 漢字音の一、華南の呉の地方から伝来した音。我国では多く僧侶が用いた。例えば「行」を呉音では「ぎょう」と読む。〔漢音ならば「こう」、唐（宋）音ならば「あん」〕

注(2) 松窓乙二の曾孫。東大医学別科を卒業して千住院址の自宅で開業。明治15年刈田郡医会長となり、42年間在任、また刈田造士館〔旧制白石中学校〕を創設した。大正8年宮城県議会議員に当選し、議長となった。同9年宮城県医師会長に選ばれた。それらの功績によって表彰を受けること百余回に及んだという。昭和6年5月9日歿、79才、白石延命寺に葬る。

注(3) 御歯黒〔おはぐろ〕。歯を黒く染めるに用いる褐色の液、鉄〔かね〕を茶の汁または酢の中に浸して作る。おはぐろの風習は、古く上流婦人の間に起り、白河院頃から公卿など男性も行い、後、民間にも流行して、室町時代には女子9才の頃これを成人の印とした。徳川時代には結婚した女性はすべておはぐろをつけた。

資料 仙台人名大辞書（菊田定郷）

仙台市史第1巻

俳諧大辞典（伊知地鉄男〔等〕）

奥州白石ばなし（藤井武夫）